

(10) 穂発芽研究会－全国の研究者が参加し、5回のワークショップ開催－

本研究会のルーツは、1992年に開かれた、第6回の国際穀物穂発芽シンポジウムにさかのぼります。この会議の総会で、次回を日本で開催することが決まりました。有力候補のドイツなどに対する作戦を、長内さん（元上川農業試験場 場長）、沢田先生（帯広畜産大学）、野田先生（当時木原生研、現岡山大学）、天野科長（北見農試）そして筆者が、ホテルの一室に集まって立てたことを思い出します。

帰国後、開催に向けて組織委員会が組織され、動き出しました。組織運営はそれとして、中身が問題です。せっかく網走で開くのですから、自ら情報を発信しようという気持ちが流れていました。そんななか、天野科長と筆者が発起して、結果的にプレシンポジウムとなった研究会が、前年（1994年）の初冬に、芽室町の新嵐山荘で開かれました。これが現在の穂発芽研究会の原型です。

データの紹介、これからやろうとしていること、レビュー、提言などなんでもありの内容でした。ゆったりと温泉にでもつかって考えるという、一般の学会とは異なる、独特のスタイルがこのとき形成されたのでした。この雰囲気は、国際穂発芽シンポジウムの雰囲気そのままと言って良いでしょう。

正式に研究会が発足したのは、網走で開催された、第7回国際穀物穂発芽シンポジウム後のことです。余剰金は穂発芽研究の振興に使うと欲しかったものの、スポンサーの農業団体からの強い要望と、「シンポジウムは成功したが、肝心の穂発芽はなくなったのかい？」という、長内さんと後藤先生（北大名誉教授）の問いかけ、そしてシンポジウムの余熱が、躊躇していた沢田先生、天野科長、野田先生、桑原室長（北農試）、筆者など現役員に発足を決断させました。当初はドイツで開催される、次回の国際穂発芽シンポジウムの報告会で、活動を終わるという時限付きの研究会であったのです。

研究会の設立総会は、約200名の参加を得て、記念講演会とあわせて教育文化会館（札幌市）で開催され、翌日は第1回ワークショップが定山溪温泉で開催されました。第2回は新嵐山荘、第3、4回は、かでの2.7（札幌

市)、第5回が今年札幌市民会館で開催されました(2000年、1月27~28日)。ワークショップには、毎回道外を含めて小麦研究者を中心に50名程度の参加があります。分子生物、生理学、遺伝、栽培、品質、化学等の異なった話題が同時に提供され、活発な議論が交わされています。この間、会員同志の共同研究が進められたり、情報や素材の交換が進められて、品種開発にいくらかでも貢献したことが成果といえましょう。

本研究会がここまで続いている理由は、穂発芽が生産上の重要障害であり、この問題の解決には、発芽・休眠という基礎的な理解も欠かせないという、農業に携わる研究者の研究意欲を刺激するからであります。当初、第4回ワークショップで終了する予定だった研究会も、「穂発芽はなくなったのかい?」という長内さん、後藤先生の問いかけで、また継続することとなりました。実際この5年間、甚大な穂発芽被害が、幾度となく起きているという事情、品質を重視する小麦民間流通への移行という事情があります。穂発芽が解決しない限り、この研究会は続くということになるのでしょうか?。

最近では、次代を託せる若い研究者の参加も見られますので、事務局としては安心してるところです。本研究会の趣旨を生かして、また、温泉につかって、ゆっくり議論する場を確保することが、当面の宿題です。

最後に事務局の一員として、この研究会を支えてくれた、前野さん(現十勝農試)、伊槻さん(現ホクレン)、楠目さん(現中央農試)、席田さん、橋本さん(グリーンバイオ研)のご苦勞にお礼申し上げます。また、ホクレンはじめ農業団体の方々には、発足の時からお世話いただいていることに、心から感謝を申し上げ、本研究会の足跡の一端を紹介しました。

<新発田 修治>